

# 能力における 祭りと日常生活の関連性

## 森の祭りを用いた中村孚美の再検討

The Connection between Festival and Everyday:  
Rethinking of NAKAMURA Fumi's Studies through Mori Festival

谷部真吾

はじめに

① 森の祭りの概要

② 商人町の祭り

③ 旧社長の解釈

④ 祭りと日常生活との関連性

むすびにかえて

### 【論文要旨】

現在、「祭礼研究」あるいは「都市祭礼（祝祭）研究」と呼ばれている分野を開拓した研究者に、中村孚美がいる。彼女は、精力的に数多くのモノグラフを記してきたが、これらの研究における特徴として、祭りと日常生活という両場面において、必要とされる能力に関連性があるとする語り口を挙げることができる。この刺激的な視点は、その後のこの分野における研究で、積極的に用いられることはなかったように思われる。そこで、本稿では、中村と同じ視点に立って、静岡県周智郡森町で行なわれる森の祭りを分析してみた。

その結果、一見すると、両者の間で必要とされる能力に関連性があるように見うけられるが、祭りの担い手からすると、これらは結びつくものではないことが分かった。というのも、彼らは、祭りと日常生活とは全く別物として認識しているため、これらを結びつけるという発想そのものが欠如していたからだ。

この認識の存在は、とりもなおさず、中村が研究対象としてきた地域との差異を意味する。従来のように、祭りに参加する人々の結合原理から分類すると、彼女が研究対象とした地域の祭りも、本稿で事例として取り上げた森の祭りも、ともに「伝統型祝祭」という同じカテゴリーに属すると考えられる。しかし、このように、祭りと日常生活とを担い手たちがどのように認識しているかという指標を加えると、同一のカテゴリーの中にも差異が存在していることを理解できよう。とすれば、次に問題となるのは、このような違いを我々ほどのように捉えるべきかである。この点についても、最後に、補足的ではあるが、その方向性を示してみた。

キーワード：祭礼研究、中村孚美、祭りと日常生活、森の祭り、認識